

9 花き①

種類	作型・品種	目標収量 (kg/10a)	施肥時期・成分施肥量 (成分kg/10a)				施肥上の留意点
			施用時期	窒素	リン酸	加里	
バラ(土耕栽培)	冬期一時休眠栽培	130,000	合計	30.0 30.0	30.0 30.0	30.0 30.0	10a当たりオガクズ無混入の完熟堆肥を20t、分解程度の低いピートモスを20m ³ 、広葉樹の良質バーク堆肥を10t程度施用して土づくりを行う。施肥は、有機質肥料主体に5～6回に分けて施用する。
バラ(ロックワール栽培)	周年栽培	130,000	培養液は各種処方例を参考にするが、冬期の施用ECは1.5～2.0dS/m、夏期は1.0dS/m前後とし給液回数を多くする。給液量に対する排液率は25～30%を目安とする。				培養液に使用する原水は、年間を通してpHが適正で、塩類濃度が低く、有害物質や病原菌を含まない安定した水質が適する。
きく	8～9月出し露地栽培	30,000 ～35,000	育苗 基肥 追肥 合計	0.1 18.0 3.0 21.1	0.1 18.0 2.0 20.1	0.1 18.0 3.0 21.1	塩類を集積させないよう余分な肥料や堆肥を投入しない。窒素成分は堆肥由来分を減らして基肥量とする。基肥を施用後の土壌中の硝酸態窒素が15mg/100g、EC値が0.7dS/mが目安となる。追肥は整枝後、土寄せする前に条間とうねの肩に施す。その後は生育をみながら対応する。
ストック	移植栽培	24,000	育苗 基肥 追肥 合計	0.2 14.0 6.0 20.2	0.2 14.0 6.0 20.2	0.2 17.0 6.0 23.2	良質な有機物を十分に施用し土壌を膨軟にするとともに、土壌pH6.5を目標に改良する。スプレー系品種は、根張りが弱いため基肥量をやや減らし追肥を多くする。追肥は、は種後35日頃に有機質化成等でほ場全体に行う。低地力ほ場や転作初年目では、ホウ素欠乏が出やすいので、ホウ砂を300～500g施用するか、ホウ素入り肥料を施用する。また、ストックはカリの吸収が多いので、カリが少ないほ場ではカリを多めに施用する。
	直播栽培		基肥 追肥 合計	26.0 6.0 32.0	19.0 6.0 25.0	25.0 6.0 31.0	

9 花き②

種類	作型・品種	目標収量 (kg/10a)	施肥時期・成分施肥量 (成分kg/10a)				施肥上の留意点
			施用時期	窒素	リン酸	加里	
トルコぎょう	ハウス栽培(土畑)	30,000	育苗	0.2	0.2	0.2	10a当たり完熟堆肥を2~3t投入し、施肥前の土壌pHは6.2~7.0、土壌ECは0.3~0.5dS/mを目安として調整する。肥料は有機質や緩効性肥料を主体とする。F1品種は吸肥力が強いので、3~5割基肥を減らし、追肥で生育を調整する。追肥は、花茎伸長開始時に1~2回行う。出らい後も葉色が薄い場合は、カリ肥料を主体に施用する。
	基肥		11.0	10.0	11.0		
追肥	4.0	4.0	4.0				
合計	15.2	14.2	15.2				
ハウス栽培(砂丘地)			育苗	0.2	0.2	0.2	
基肥	15.0	13.0	15.0				
追肥	6.0	6.0	6.0				
合計	21.2	19.2	21.2				
りんどう	普通栽培(定植1年目)	25,000	基肥	15.0	15.0	15.0	酸性土壌を好むことから、pHが極端に低い場合以外は、石灰やアルカリ性肥料を施用しない。堆肥は10a当たり3t程度施用する。定植1年目の基肥リン酸はく溶性で上乘せする。追肥は7月と8月の2回行う。定植2年目の施肥は、萌芽前70%、開花40日前頃30%に分施する。
	追肥		8.0	8.0	8.0		
合計	23.0	23.0	23.0				
普通栽培(定植2年目以降)			追肥	15.0	15.0	15.0	
合計	15.0	15.0	15.0				
アルストロメリア	地中冷房春植え栽培	90,000	基肥	20.0	30.0	15.0	根張りを良くするため、1a当たり堆肥2m ³ と粗大有機物1m ³ 程度投入する。生育時のEC値は0.5~0.8dS/mが適当で、追肥はこのEC値などに基づき行う。初期からシュートが多くなってくるので、それぞれに応じた追肥を行う。
			追肥	30.0	30.0	35.0	
			合計	50.0	60.0	50.0	
オリエンタルハイブリッドユリ	抑制栽培	15,000 ~18,000	基肥	8.0	8.0	8.0	有機質に富む排水良好なほ場を好む。土壌化学性の改良目標は、pH5.5~6.0、EC0.5dS/m程度とする。完熟堆肥は、10a当たり3~5t施用し、深耕目標を30cm程度とする。追肥は発らい期~つぼみ肥大期に分施する。
			追肥	7.0	7.0	7.0	
			合計	15.0	15.0	15.0	

9 花き③

種類	作型・品種	目標収量 (kg/10a)	施肥時期・成分施肥量 (成分kg/10a)				施肥上の留意点
			施用時期	窒素	リン酸	加里	
新鉄砲ゆり	雨よけ(8~9月)栽培	20,000	基肥 追肥 合計	12.0 5.0 17.0	12.0 5.0 17.0	12.0 5.0 17.0	土壌はpH 6.0前後に調整する。土壌的には、耕土が深く、肥沃で保水力に富んだほ場が適し、いや地性が強く連作をきらうので、少なくとも3~4年ごとに輪作が必用である。有機質に富む排水良好なほ場を好む。土壌化学性の改良目標は、pH5.5~6.0、EC0.5dS/m程度とする。完熟堆肥は、10a当たり3~5t施用し、深耕目標を30cm程度とする。追肥は発らい期~つぼみ肥大期に分施する。
スターチスシヌアータ	春夏出し栽培	72,000	基肥 追肥 合計	10.0 3.0 13.0	10.0 3.0 13.0	10.0 3.0 13.0	作付け前に堆肥を3t程度投入する。施肥は基肥だけで十分生育できるが、追肥をする場合は、抽だい初期までとする。ホウ素欠乏による「翼の裂化」発生を防ぐため、基肥にホウ砂を0.2~0.4kg/10a施用すると良い。土壌pHは6.5程度に調整する。
宿根性スターチス	施設無加温栽培	13,500	基肥 追肥 合計	9.0 9.0~15.0 18.0~24.0	12.0 12.0~18.0 24.0~30.0	12.0 12.0~18.0 24.0~30.0	肥効の持続が重要であることから、基肥は有機質肥料主体とする。土壌のpHは6.5~7.0、ECは0.5dS/mを目安とする。追肥は、春の開花後、秋の開花後、春の抽だい期前の3回行う。
フリージア	冷蔵促成栽培	85,000	基肥 追肥 合計	17.0 適宜 17.0	17.0 17.0	22.0 22.0	ハウス栽培となるので、前作の残効をECで測定し、塩類障害回避のため1.0dS/m以上であれば除塩対策を行う。追肥としては、硫酸カリなどの効果が高い。定植から開花までの日数が短いので速効性の化成肥料を中心に施用する。
デルフィニウム	電照・加温秋冬出し+春出し栽培	エラータム系 45,000 ベラドンナ系 90,000	基肥 追肥 越冬後追肥 (二度切り) 合計	15.0 3.0 10.0 28.0	15.0 3.0 10.0 28.0	15.0 3.0 10.0 28.0	10a当たり堆肥を2~3t施用し、石灰資材で土壌pH6.0~6.5を目標に調整する。追肥は1番花の収穫後は必ず実施し、葉色を見ながら定期的に行う。

9 花き④

種類	作型・品種	目標収量 (kg/10a)	施肥時期・成分施肥量 (成分kg/10a)				施肥上の留意点
			施用時期	窒素	リン酸	加里	
宿根かすみ そう	秋出し栽培 春出し栽培	11,850	基肥 追肥 越冬後追肥 (二度切り) 合計	17.0 適宜 5.0~8.0 22.0~25.0	17.0 5.0~8.0 22.0~25.0	17.0 5.0~8.0 22.0~25.0	栽培土壌はpH6.5 ~7.0程度が適してい る。堆肥は10a当たり 3t以上施す。新植苗 (さし芽苗)定植の場合 の基肥は、三要素とも 10a当たり15~20kgと する。据え置き後は、 3~5kg程度とする。カ リとカルシウムの吸収 量がとくに多い。草丈 や切り花品質確保の ためには、生育前期 及び中期に重点をお いた施肥が効果的だ るので、初期の活 着促進と生育状況を みて液肥で数回追肥 する。
カーネーショ ン	加温冬春出し栽培	148,000	基肥 追肥 合計	21.0 49.0 70.0	9.0 21.0 30.0	21.0 49.0 70.0	定植時の土壌は、 pH6.0前後、 EC0.6dS/mが目安と されている。施肥は、 有機質肥料や肥効調 節型肥料など緩効性 のものを主体に使用 する。定植~摘芯後 までの追肥は、栽培 床のECが1.0dS/mを 越えないよう注意しな がら液肥を施用する。 開花期には、床中の 肥料成分が一定以上 を保つために1~2か 月間隔で施す。また、 土壌中へのリン酸の 過剰蓄積は切り花品 質の低下を招くので、 100mg/100gを越える 場合は施用を控え る。
べにばな	施設無加温6月出し栽培	40,000	基肥 追肥 合計	10.0~15.0 適宜 10.0~15.0	10.0~15.0 10.0~15.0	10.0~15.0 10.0~15.0	直まき栽培のため 排水のよいほ場を選 定する。土壌pH6.5前 後に調整する。良質 堆肥を10a当たり3~5 t施用し、耕土深は20 ~30cm確保する。施 肥量は前作を考慮し て決定する。初期生 育が不良の場合N成 分で1kg/10a程度追 肥する。